

期待の若手シリーズ

**私にも  
言わせて!**  
第111回

**さまざまな地域で働いて、公衆衛生の  
重要性を感じ、じっくり予防医学に取り  
組んでいきたい**



郡山市保健所健康政策課  
主任医師  
**郡司 真理子**

平成20年福島県立医科大学卒業。福島県内での初期研修を経て、病理医として福島県内で1年、東京都内一般病院に6年間勤務。29年昭和大学大学院医学研究科入学。令和3年4月より郡山市保健所勤務。

一般病院勤務を経て、令和3年4月から郡山市保健所に勤務しています。入職後すぐに国立保健医療科学院で研修を受講し、修了してからの多くの時間を新型コロナウイルス感染症対策に追われています。新型コロナウイルスの流行が落ち着きましたら、地域の人々の健康増進のために行政としてできることを頑張っていきたいです。

**公衆衛生医師として  
勤務するまで**

私は、現在勤務する保健所がある福島県郡山市の出身で、同じ県内にある大学を卒業後、郡山市内の病院で初期研修医として勤務し、その後は病理医を選択し、福島県で1年、東京都で10年勤務してきました。

現在、新型コロナウイルス感染症対策が保健所の主な業務となっていますが、私は研修医だったころ、感染症がここまで重要な疾患だと捉えていませんでした。研修病院にて感染症専門医にその重要

性、抗生剤の使い方などをしっかりと教えていただきましたが、その当時よりも、病理医として勤務していた時や、保健所で働いている現在の方が重要に感じています。

病理医として病院で病理診断や解剖をしていると、驚くほどに感染症が原因となる疾患があり、また、感染症が原因で亡くなる人が多いということが分かりました。

例えば、結核などの呼吸器系の感染症、虫歯の抜歯後の感染性心内膜炎、さまざまな手術の術後感染症、白血病患者等のコンプロマイズドホストに発症する日和見感染症、梅毒などの性感感染症などです。

れているか知ることができ、とても大切なネットワークとなっています。

**【新型コロナウイルス感染症対策】**

令和3年7月、科学院での研修が修了した直後から、新型コロナウイルス第5波の対応に当たることになりました。私は主に患者の入院調整を行っていました。当市は人口約33万人で、多い日では1日当たり36人の陽性患者が発生し、入院先の調整が難航していました。そのような最中、DMATの先生方や福島県から応援に来てくださった保健師や事務職の方々には大変助けられました。特にDMATの先生にはどのような点に注意して入院調整をするのか、細かくご指導・ご助言をいただき、とても勉強になりました。第5波が落ち着いた後は、



郡山市のイメージキャラクター「がくとくん」と市民健康アンケートの結果について広報中

ATの先生にはどのような点に注意して入院調整をするのか、細かくご指導・ご助言をいただき、とても勉強になりました。第5波が落ち着いた後は、

さらに、日本人の胃がんの98%以上はヘリコバクターピロリ菌に感染することで起こるといわれています。子宮頸がんや一部の咽頭がんもヒトパピローマウイルス(HPV)感染が原因になります。このうち、結核やピロリ菌、HPV感染等は公衆衛生によって変えることができるものだと思います。

東京で最初に勤務していた病院はいわゆる高級住宅街にあり、患者のヘルスリテラシーが高く、定期的に健診を受診し、体調に違和感を覚えたらずに病院に相談する方が多い地域でした。結果、がんが発見されても比較的早期に発見されることが多い状況でした。

一方、東京の有名な繁華街近くの病院に異動すると梅毒が多発している、子宮頸部のHPVに感染している若年層の患者が他の地域より多い状況でした。大学院在学中

第6波に向けて、自宅療養者への往診や訪問看護の体制を整えたり、入院待機ステーションの準備を行っていました。準備に当たっては、保健所職員のみならず、地域の病院や開業医の先生方、訪問看護ステーションの方々、県の担当者等関係各所との調整があり、これまでの病院勤務ではできない経験をすることもできました。この原稿を執筆している現在(令和4年1月)、新型コロナウイルス第6波が到来し、当保健所もまた忙しくなってきました。第6波の前に準備していたことが、うまく機能することを願っています。

**【SDGs】**

郡山市は令和元年7月、内閣府が選定する「SDGs未来都市」(元年度は全国31都市)に選出されました。さらに、先導的な取り組みをする「自治体SDGsモデル事業」に東北で初めて選ばれました。その中心事業として「全世代健康都市圏創造事業」があり、保健所を中心として「健康」に取り組んでいます。当市がその事業に取り組む理由としては、人口減少と

は大学のクリニックで健診や人間ドックを担当し、多数の健診受診者を診て本人の健康に対する意識と早期発見の重要性を感じました。自分が子どもを授かってからはネウボラ面接や産後の新生児訪問、行政が主催する産後の保護者交流の場やそこでの保健師相談、乳幼児健診などを通して、行政サービスの重要性を実感しました。特に産後では子どもが小さく出掛けられる場所が限られていたため、行政サービスによる訪問や交流の場があったことは大変ありがたく感じました。

このようなことから、健康や病気の予防について公衆衛生の重要性を感じるようになりました。その後、東京都に勤務する公衆衛生医から仕事の内容について伺う機会があり、公衆衛生医として働くことについて興味を持つようになり、地元の郡山市保健所で働くこ

平成23年の東日本大震災後の状況を分析した結果、子どもを含む全世代の「健康確保」が重要と捉えているためです。また、「健康」は市民生活の質の向上だけでなく、「産業」や「社会活動」を支える重要な基礎となります。これを推進するために、令和3年2月12日に、福島県立医科大学とSDGsの推進に関する包括連携協定を結びました。現在は、郡山市のデータを大学に提供し、共同研究を進めているところですが、市民を対象に健康アンケートを実施し、市民の健康状態を確認し、それを分かりやすく市民に伝えたり、今後の活動に生かすことにしています。

**おわりに**

予防医学に興味を持ち、保健所に入職しましたが、現在の業務の多くは新型コロナウイルスの対応に当たっている状況です。近い将来、新型コロナウイルスの流行が落ち着きましたら、地域の人々の健康増進のために行政としてできることを頑張りたい。一人一人がその人らしく生活できるような街づくりの一端を担ってみたいと思います。